日本学術会議 中国・四国地区ニュース

No. 40
2009. 3

発　行
日本学術会議
中国・四国地区会議

記　事　頁

第２１期代表幹事ご挨拶　１
第２０期代表幹事を終えて　２
学術会議地区活動について　３
公開学術講演会について　４
第２１期日本学術会議中国・四国地区運営協議会委員の紹介　６
会員・連携会員一覧（中国・四国地区）　１４
地区会議事務局からのお知らせ　１５

第２１期代表幹事ご挨拶

日本学術会議中国・四国地区会議　代表幹事
第三部会員（高知工科大学　学長）
佐久間　健人

この度、前任の武田和義先生の後を受けて、中国・四国地区会議の代表幹事を務めさせていただくことになりました。四国に住んでまだ 3 年余りにすぎず、地区の実情に詳しくはありませんが、運営協議会委員および地区会議の構成員の先生方にいろいろ御教示いただきながら微力を尽くしたいと思います。

御承知のとおり、日本学術会議には 210 名の会員がおりますが、中国・四国地区の会員は、現在僅か 4 名です。政治、経済、情報などあらゆる分野での地域の地盤沈下という状況が、日本学術会議でも中国・四国地区に顕著に現れています。このため、日本学術会議でなされる議論でも、地域の実態を理解した発言が極めて少ないといえます。中国・四国地区の会員が少ないことはすでに金澤一郎会長はじめ執行部の方々にお伝えし、改善を要望しました。今後も継続的に中国・四国地区への配慮を訴えていきます。それとともに、会員の方々に地域の問題を正しく認識していただき、問題解決のための適切な提言等が日本学術会議から発信されるための努力をしたいと思います。構成員の先生方のお力をお借りして、この問題解決に向けた中国・四国地区の対応を考えていきたいと思います。さまざまな御提案をいただければ幸いです。

第２０期代表幹事を終えて

日本学術会議中国・四国地区会議　運営協議会委員
第二部会員（岡山大学資源生物研究所
大麦・野生植物資源研究センター長　教授）
武田　和義

平成17年10月に発足した第20期の日本学術会議はそれまでの会員選考方法を一変させ、cooptationという耳慣れない方式を採用した。cooptationとはメンバーがメンバーを選ぶという、言わば教授選考に近い形である。さらに、女性の比率を20%（42名）、かつ、若手を登用するという方針の下に、40歳代の女性会員も登場した。

従来から会員は首都圏に集中していたが、第20期では会員の地域偏在は加速され、中国・四国地域からは当初、会員が1名しか選出されなかった。そのため、東京在住の会員2名と第19期の研究連絡委員（第20期からは連携会員と呼ぶ）を特任連携会員として補充し、とりあえず地区会議を出発させると言う形を取らざるを得なかった。その後、幹事会においても地区会議のあり方が種々議論され、地区在住の連携会員を地区運営協議会の委員に加えるという形で一応の決着を見ることとなった。研究者の母集団が首都圏に集中していることは疑いないが、会員の過度の偏在は地方の活性を削ぐことになるので、なんらかの配慮が必要だろう。現実に、連携会員の県別の人数は極端に偏っている。

その後、他の地区から会員の転入があり、現在は4名の会員が中国・四国地区に所属しているが、将来的には地区で育った研究者が中心となって地区会議を運営してゆくことが望まれる。

学術研究は普遍なる物を目指すという側面とともに、時代性と地域性も有しており、政治・経済のみならず、学術の分野でも「地方」というのは大きな課題である。地方とはいつまでも中央の助け無しには存在し得ない後進地域なのか、それとも豊かな多様性と可能性に満ちた約束の地なのか、選択と集中に対する的確なアンチテーゼを提示できるかどうかが問われていると言えよう。学術会議を我々にとって身近な存在にするためにも、地方からの声を上げてゆく必要がある。

最後に地区会議の事務局を担当された広島大学の関係者の皆さん、ならびに地区会議の開催にご協力いただいた各大学の関係者の皆さんにお礼申し上げます。

学術会議地区活動について

日本学術会議中国・四国地区会議　代表幹事
第三部会員（高知工科大学　学長）
佐久間　健人

平成 20 年度は、日本学術会議の第 20 期から第 21 期への交替の年に当たりました。第 20 期の地区会議の会員は 2 名でありましたが、幸いにも第 21 期にはこれが 4 名となりました。会員全体からみると、これでも十分とはいえませんが、ひとまず会員が増えたことを喜びたいと思います。また、地区会議運営協議会委員も交替がありましたが、今期の委員についても中国・四国地区の各県から最低 1 名は参加していただいております。

今年度の地区活動は、新たな試みとして、5 月 8 日に岡山大学資源生物科学研究所において科学者懇談会を開催致しました。この会合には、第 20 期日本学術会議第 2 部部長（第 21 期日本学術会議副会長）の唐木英明先生をお招きし、中国・四国地区の連携会員との懇談・意見交換を行いました。また、11 月 28 日には鳥取大学の共催を得て、「地域の知の拠点―鳥取大学の新たな試み―」と題する公開学術講演会を開催しました。この講演会には第 21 期日本学術会議副会長の大垣眞一郎先生にご参加いただきました。この講演会の概要につきましては、本ニュースの記事をご覧ください。

地区会議といたしましては、今年度もう 1 度科学者懇談会（平成 21 年 3 月 9 日広島大学）を、平成 21 年度は公開学術講演会及び科学者懇談会（平成 21 年 7 月 11 日徳島大学）を予定しております。開催にあたっては改めて御案内申し上げますので、是非御参加下さいますようお願い申し上げます。

日本学術会議の諸活動の中で、地区活動の役割は高く位置付けられているとは言えないのが現状です。予算上の制約もあり、地区活動を活性化することは容易ではありませんが、今後の進め方等について議論を積み重ねていきたいと思っています。

公開学術講演会について

日本学術会議中国・四国地区会議　運営協議会委員
（鳥取大学地域学部　准教授）
山下　博樹

日本学術会議中国・四国地区会議主催の公開学術講演会が、鳥取大学の共催、鳥取県、鳥取市の後援を得て、去る 11 月 28 日鳥取大学を会場に開催された。「知と実践の融合」を大学のスローガンに掲げる鳥取大学では、県内に大学が少ないことや理系学部が多いことなどから地元企業や行政などとの連携が密に図られている。今回の公開学術講演会では「地域の知の拠点－鳥取大学の新たな試み－」をテーマに、鳥取大学のこれまでの地域との連携事例を取り上げながら、法人化後の地方大学が果たすべき教育面、研究面以外の使命や今後のあり方が議論された。当日は中国・四国地区会議運営協議会代表幹事の佐久間健人先生をはじめ、多数の運営協議会委員のご参加を得た。また当初の予想に反して学内外からも多くの聴衆を集め、工学研究科棟の大講義室がほぼ満員となる 180 名の参加者があり、用意していた資料が途中で不足する事態まで生じた。

講演会の冒頭には、このために東京よりお越し頂いた日本学術会議副会長の大垣眞一郎先生に続き、佐久間先生、鳥取大学の能勢隆之学長よりご挨拶があった。第Ⅰ部の基調講演では、先ず初めに慶應義塾大学教授・鳥取大学客員教授の片山善博先生より「地域と大学」のテーマで、ご自身の鳥取県知事時代のエピソードを交え、今後の大学と地域との関わり方や課題について報告があった。もう一つの基調講演では、鳥取大学教授の田邉賢二先生から「ナシ産地鳥取と鳥取大学農学部―産地に軸足を置いた 88 年の研究・教育―」としてナシ栽培を通じての、鳥取大学の長年の地元への関わり・貢献について技術的な課題解決の例を挙げながら報告を頂いた。

第Ⅱ部のパネルディスカッション「持続可能な過疎社会の構築に向けて」では、鳥取大学と地域との連携の成果として、（有）内水面隼研究所の七條喜一郎氏より「休耕田活用によるホンモロコ養殖の普及」がありホンモロコ養殖での苦労や成果について、鳥取大学准教授の谷本圭志先生からは「地域における公共交通の確保策」で中山間地域などでの公共交通問題の現状や課題について、鳥取県日南町役場の内田　格氏は「産官学連携から見えてくるまちづくり」として地元をはじめとした多くの大学を活用して取り組んできた施策例について、それぞれ報告があった。コーディネーターの日置佳之鳥取大学教授の進行のもと、これらの報告に対してコメンテーターの片山先生からのコメントや、フロアからの質問があり、それらに答えながら時間まで熱心な議論

が行われた。

今回の公開学術講演会では鳥取大学の取り組みを広く知って頂くだけでなく、これまで教育と研究を主な目的としてきた大学にとって、とりわけ地方大学では地域との連携とそれとリンクした教育･研究の活性化が重要となっていることが再認識された。終了後は大学生協食堂に会場を移し関係者での情報交換会が行われ、話題となったホンモロコの天ぷらや、農学部が商品化に尽力した日本酒「強力(ごうりき)」、日南町特産のトマトジュースなどが振る舞われ、有意義な時間を共有することが出来た。最後に本講演会を開催するにあたり、日本学術会議中国・四国地区会議事務局の皆様、鳥取大学研究・地域連携課の皆様、前連携会員の鳥取大学教授辻本　壽先生には開催までの大変な準備作業をして頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

片山先生による講演

田邉先生による講演

パネルディスカッションの様子
左から，コーディネーターの日置先生，パネリストの七條，谷本，内田先生，コメンテーターの片山先生

第２１期日本学術会議中国・四国地区会議
運　営　協　議　会　委　員　の　紹　介

さくま　たけと
佐久間　健人

専門：材料科学

日本学術会議第三部会員

中国・四国地区会議代表幹事

高知工科大学　学長

私の専門は材料科学です。当初は、金属材料の研究に従事していましたが、途中からセラミックスの研究に転向しました。このため、私の研究はかなり幅広い分野にわたっており、その内容を短く要約することができないのが悩みです。しかし、材料科学分野を広く知ることができたのが財産です。

私は日本学術会議とはかなり以前からご縁があったのですが、第 19 期に会員に選出され、2 つの委員会の委員長を任されてかなりの量の雑務をこなすことになりました。しかし、第 20 期の組織改革で 9 割ほどの会員が入れ替わり、残留することになった私は、以来、学術会議で浦島太郎の気分を味わっています。

私が、中国・四国地区のメンバーに加えていただいたのは、高知工科大学に赴任した 2005 年 12 月であり、新参者です。目下、地域再生問題を勉強中です。

読書と 50 代からはじめたテニスが趣味ですが、前者は視力の衰え、後者は体力の衰えと闘う毎日です。

たけだ　かずよし
武田　和義

専門：作物育種学　植物遺伝資源学

日本学術会議第二部会員

岡山大学資源生物科学研究所

大麦・野生植物資源研究センター長　教授

（略歴）

1943 年　北海道生まれ

1971 年　北海道大学大学院修了（農学博士）

弘前大学農学部助手、同助教授、米国アイオワ州立大学客員教授、岡山大学農業生物研究所助教授を経て

1990 年　岡山大学資源生物科学研究所教授

2005 年　日本学術会議会員

2009 年　岡山大学退職予定

元日本育種学会長、元岡山大学資源生物科学研究所長

1990 年　日本育種学会賞受賞

2004 年　日本農学会賞受賞

2009 年　日本学士院賞受賞

岡山大学資源生物科学研究所が保有する約 10,000 系統のオオムギを供試して各種ストレス耐性に関する遺伝資源評価、遺伝解析を行ってきた。1988 年から 40 回にわたって訪中し、主に、黄河流域のストレス環境に適応するムギ類の選抜評価に従事し、その業績により、2000 年　中国科学院石家庄農業現代化研究所名誉教授。

やまうち　こうへい
山 内　皓 平

専門：水産学

日本学術会議第二部会員

愛媛大学社会連携推進機構　特命教授

南予水産研究センター長

私は第二部（生命科学）に所属して、常置の農学委員会、食料科学委員会に属して、食料科学委員会の委員長を勤めています。

中国・四国地区は、他地区に比べて会員、連携会員とも数が少なく、問題を残していますが、皆様方と本地区の科学者コミュニティの発展のために活動できたらと思っています。宜しくお願い致します。

私は一昨年四月から愛媛大学社会連携推進機構の特命教授として南予水産研究センター立ち上げのお手伝いをしていましたが、昨年四月のセンター開所を機に北海道大学から同センター長として赴任してきました。

当センターは、農林水産業に経済を大きく依存している南予の愛南町にあり、地域貢献型のセンターとして水産を核にして南予地域の振興に寄与することを目的としています。今後、皆様方のお知恵を拝借したいと考えていますので、ご指導・ご助言をいただけたらと思います。

かもん　まさし
嘉門　雅史

専門：土木工学・環境地盤工学

日本学術会議第三部会員

高松工業高等専門学校　校長

平成 20 年 10 月から高松工業高等専門学校へ赴任しているが、それまでは京都大学大学院地球環境学堂社会基盤親和技術論分野教授として、地盤環境の保全に関する研究教育に従事していた。

少子高齢化社会における社会基盤整備のあり方は、従来の経済発展型予測手法に基づく整備計画とは大きく異なってしかるべきであることから、気候変動による自然営力の変化をも考慮した新しい社会基盤整備のあり方と適用技術を探求している。特に、社会の基盤条件として不可欠である、水文・地盤環境の保全と修復のためのインフラストラクチャ創生技術を、環境社会システムとどのように調和させうるかについて研究してきた。さらに、人間活動の結果として排出される廃棄物や建設発生土の適切な処理処分・有効利用対策のハード・ソフト的開発や、廃棄物や有害物質で汚染された地盤の浄化技術とその評価に関する研究などを実施してきた。これらの研究の成果は建設発生土や建設汚泥のリサイクルマニュアル、建設工事で遭遇する地盤汚染対策やダイオキシン類汚染対策マニュアルなどに反映されている。

日本学術会議では土木工学・建築学委員会の幹事として、「国土と環境分科会」の世話役を担当している。

いちい　まさひこ
一井　眞比古

専門：植物遺伝育種学

香川大学　学長

2005 年 10 月から現職に就いていますので，専門分野に関する研究活動をほとんど行っていません。かっては植物の根の形態や生理機能を遺伝的に改良するための基礎研究を作物であるイネを対象にして取り組んでいました。根の先端部にある根毛や側根（主根から生ずる枝根）のない突然変異体やケイ酸を吸収しない突然変異体を独自に開発し，それらを活用して根毛や側根の形態形成及びケイ酸吸収機構を遺伝学的に

解明し，新しい機能を持った作物の開発に役立てようとしていました。

法人化後の地方国立大学を取り巻く状況はたいへん厳しいですが，地方分権の時代には地方国立大学の役割と使命はますます重要になります。「地域の知の拠点」としての機能をより一層高め，社会のニーズに迅速に対応するために，柔軟な教育研究体制の構築と学部・大学院研究科の再編に取り組んでいます。

しのだ　すみお
篠田　純男
専門：薬学
岡山理科大学　教授
岡山大学　名誉教授

薬学分野の教育研究を行って来ましたが、本質的には病原細菌学を専門としており、阪大微研、岡山大・薬（平成 17 年定年退職）を経て現在の岡山理科大学まで、基本的に腸炎ビブリオ、コレラ菌などの病原ビブリオの研究を行っており、JICA の下痢症制圧専門家としてインドにしばしば派遣されました。

日本学術会議では、第 18 期および第 19 期では第 6 部会員に選出されて微生物学研究連絡委員会の委員長を務めました。当時は現在の 3 部制と異なって 7 部制であり、6 部は農学系で、微生物学は応用微生物学、病原微生物学など様々なものを含みますが、6 部に所属していたので、医学系の病原微生物学を専門とする筆者も 6 部会員として活動しました。

また、第 19 期では中国・四国地区代表幹事を務めましたが、島根大学の企画でノーベル賞学者の小柴昌俊先生、広島大学の企画で養老孟司先生の講演などを、担当大学のご努力で出来たことが印象深く残っています。

そね　さぶろう
曽根　三郎
専門：呼吸器病疾患、特に肺がんの分子標的治療
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部　教授
（呼吸器・膠原病内科学分野、腫瘍内科学分野）

「肺癌の転移メカニズムの解明とその制御に向けた分子標的治療の研究を行っております。日本学術会議は 18,19 期と呼吸器学研究連絡委員として関わっておりましたが、第 20 期以後は連携会員として臨床医学委員会呼吸器分科会委員に所属しております。

平成 17 年度より、産学連携推進による臨床研究に係る利益相反マネージメントをいかに本邦でも根付かせるかを課題に、医学部長会議・病院長会議、文科省検討班、臨床系関連学会などで利益相反指針の策定に向けた取り組みを行っております。日本学術会議中国・四国地区会議は専門分野の異なる多様な研究者が集まり、情報交換並びに交流を深める場として大きな意義をもつものであり、わが国の学術の進歩と共に地域の活性化に結びつけていくことが大切と思います。地区会議は地域から学術推進に係る問題点や解決に向けた提言を幹事会、機能別委員会へと発信を担う役割があると思います。」

（略歴）

昭和 48 年徳島大学医学部卒

昭和 53 年 9 月米国国立癌研究所フレデリック癌研究センターへ[癌転移機構とその治療法開発研究］のため留学（2 年 4 ヵ月）

昭和 59 年米国テキサス大学ＭＤアンダーソン病院癌研究所（3 カ月）

平成 4 年徳島大学医学部助教授（第 3 内科学）

平成 6 年徳島大学医学部教授（第 3 内科学）

平成 11 年徳島大学医学部附属病院治験管理センター長

平成 14 年徳島大学医学部長（4 年間）

平成 16 年徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部長（4 年間）

（学会開催）

平成 13 年度日本がん転移学会会長

2006 年度国際がん転移学会会長

平成 20 年度日本呼吸器学会会長

平成 21 年度日本がん分子標的治療学会会長

（社会活動）

文部科学省「臨床研究の倫理と利益相反に関する検討班」班長（平成 16-18 年）

日本医師会「会員の倫理・資質向上委員会」委員(平成 18-20 年)

日本学術会議連携会員（平成 18 年―現在）

たなべ　しんすけ
田辺　信介

専門：環境化学

愛媛大学沿岸環境科学研究センター　教授

有害物質による地球規模の環境汚染と野生生物およびヒトに対する影響について研

究。主な著書に、Bioindicators of POPs－Monitoring in Developing Countries, Kyoto University Press (2006)がある。2002～2006 年度 21 世紀 COE 拠点リーダー、2007 年度～グローバル COE 拠点リーダーを務めている。

（略歴）

1975 年愛媛大学大学院農学研究科修士課程修了

1977 年愛媛大学農学部助手

1985 年農学博士（名古屋大学）

1988 年愛媛大学農学部助教授

1995 年愛媛大学農学部教授

1999 年より現職

（表彰）

1985 年日本海洋学会岡田賞

1999 年日産科学賞

2000 年 ISI 引用最高栄誉賞（環境化学分野）

2003 年ベトナム政府フレンドシップメダル

2004 年日本環境化学会学術賞および日本環境科学会学術賞

2005 年 SETAC（北米環境毒性学化学学会） Founders Award 国際賞

2007 年 SETAC/Menzie-Cura Environmental Educational Award 国際賞などを受賞

やました　ひろき
山 下　博 樹

専門：都市地理学、リバブル・シティ論

鳥取大学地域学部　准教授

第 21 期より連携会員となりました鳥取大学の山下です。学術会議では第 1 部の地域研究委員会に所属しております。専門は都市地理学、特に持続可能で住みよい都市（Livable City）の空間構造について、カナダ、オーストラリア、イギリス、フランスなど欧米を中心とした地域での先進的な都市政策を日本の都市にどのように応用できるかについて研究しております。また国内都市を対象としては、とりわけ地方都市で問題となっている中心市街地衰退の問題にも取り組んでいます。学術会議の仕組みや活動など良く分からないまま、地区会議運営協議会委員を仰せつかりました。昨 11 月には前任の運営協議会委員でした鳥取大学・辻本壽先生と公開学術講演会「地域の知の拠点―鳥取大学の新たな試み―」を皆様のご協力により無事開催することができ、安堵しております。中国・四国地区の皆様並びに運営協議会の皆様にご迷惑をお掛け

しないよう、努力していく所存です。どうぞ宜しくお願いいたします。

すやま　ようこ
陶山　容子

専門：無機材料化学

島根大学総合理工学部　教授

中国･四国地区会議の第 21 期運営協議会委員をつとめさせていただくことになりました。日本学術会議第三部の連携会員としては、材料工学委員会材料構造化コンバージングテクノロジー分科会の活動に参加しております。

略歴を紹介させていただきます。出身は、鳥取県米子市です。京都大学薬学部を卒業した後、九州大学工学部応用化学科の加藤昭夫教授の下で無機材料化学分野の研究の道に入り、工学博士の学位を取得しました。マサチューセッツ工科大学の博士研究員、(財）ファインセラミックスセンター主任研究員を経て、平成 8 年 4 月から島根大学総合理工学部教授を務めております。現在の主な研究テーマは、①二酸化チタン光触媒材料の開発と応用、②誘電体ナノ粒子の新規合成と物性、③無機―有機ハイブリッド材料の創製、です。学会は日本セラミックス協会などに所属し、男女共同参画のハイブリッド材料研究会を立ち上げ、研究会活動を行っています。中国・四国地区会議の諸先生方のご指導を得て､委員としての役割を果たせればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

としま　たもつ
利島　保

専門：神経心理学

県立広島大学　理事

広島大学　名誉教授

20 期から 1 部の 6 年連携会員であることから今期も地区会議運営協議会委員を務めさせていただくことになりました｡私が事務局のある広島大学の出身者ということで、この役を引受けておりますが、中国・四国地区には今期も 1 部の会員がおられないのは、地域性を重んじるとした学術会議会員選出に何かしら疑問すら感じています。20 期と 21 期に、1 部心理学・教育学委員会の常置分科会「心理学教育プログラム検討分科会」が設けられており、その委員長として平成 20 年 4 月には分科会対外報告「学士

課程における心理学教育の質的向上とキャリアパスの確立」を出すことができました。今期の分科会では、文科省が学術会議に依頼している「学士課程教育のあり方」の審議において、人文系カリキュラムのモデルとして機能するように、対外報告に基づく人文系大学教育の認証評価ベンチマークが確立される政策提言をするよう行動計画を練っております。

みうら　のりこ
三浦　典子
専門：社会学
山口大学人文学部　教授

1979 年より山口大学人文学部で社会学の学生を指導してきている。2001 年に、人文社会系の博士後期課程の独立研究科「東アジア研究科」が設立され、中国や台湾からの留学生と研究する機会も増えてきた。

専門は都市社会学で、これまで人の動きと地域社会との連動的な変化という視点から、日本の多様な都市社会の現状分析を試みてきた（『流動型社会の研究』1991 年、恒星社厚生閣）。

近年は、産業都市における企業の社会的責任や社会貢献活動の観点から、官民の連携した環境問題の克服や企業メセナによるまちづくりの実証的分析を行っている(『企業の社会貢献とコミュニティ』2004 年、ミネルヴァ書房)。

さらに、東アジアにおいて近代化がいち早く進展した日本にみられる都市高齢化現象は、東アジア諸国においても類似して現れてきており、高齢社会への対応の比較研究を通じて､東アジア社会の基層文化の特徴を活かした施策の可能性を追究している。

会員・連携会員一覧（中国・四国地区）

【鳥取県】

三野　徹	（農学）	鳥取環境大学教授 京都大学名誉教授
山下　博樹	（地域研究）	鳥取大学地域学部准教授

【島根県】

陶山　容子	（材料工学）	島根大学教授

【岡山県】

池端　雪浦	（史学）	東京外国語大学名誉教授
梶谷　文彦	（基礎医学）	川崎医科大学名誉教授 岡山大学特命教授
公文　裕巳	（臨床医学）	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 泌尿器病態学教授
斎藤　清機	（化学）	放送大学岡山学習センター所長
佐々木　宏子	（心理学・教育学）	環太平洋大学次世代教育学部 乳幼児教育学科（教授・学科長）
篠田　純男	（薬学）	岡山理科大学理学部教授 （岡山大学名誉教授）
白石　友紀	（農学）	岡山大学大学院自然科学研究科 教授
高階　秀爾	（史学）	大原美術館館長 東京大学名誉教授
滝川　正春	（歯学）	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科/ 歯学部口腔生化・分子歯科学分野 教授，歯学部長
○武田　和義	（農学）	岡山大学資源生物科学研究所所長 教授
中筋　房夫	（農学）	岡山大学名誉教授
中原　忠男	（心理学・教育学）	環太平洋大学学長特別補佐・教授
二宮　正夫	（物理学）	岡山光量子科学研究所長
松本　英明	（農学）	岡山大学名誉教授
森島　恒雄	（臨床医学）	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 小児医科学教授
渡邊　達夫	（歯学）	倉敷成人病センター　研究主幹

【広島県】

有本　章	（心理学・教育学）	比治山大学高等教育研究所所長、 現代文化学部教授 （広島大学名誉教授）
岩田　穆	（電気電子工学）	広島大学大学院先端物質科学研究科 教授
太田　茂	（薬学）	広島大学大学院医歯薬学総合研究科 教授
岡崎　正之	（歯学）	広島大学大学院医歯薬学総合研究科 教授
岡本　祐子	（心理学・教育学）	広島大学大学院教育学研究科教授
奥村　晃史	（地球惑星科学）	広島大学大学院文学研究科教授
神谷　研二	（基礎医学）	広島大学 原爆放射線医科学研究所教授
菊池　章	（基礎医学）	広島大学大学院医歯薬学総合研究科 教授
窪田　幸子	（地域研究）	広島大学大学院総合科学研究科 准教授
住居　広士	（社会学）	県立広島大学大学院教授 （保健福祉学専攻）
谷口　順彦	（食料科学）	福山大学生命工学部 附属内海生物資源研究所教授
利島　保	（心理学・教育学）	広島大学名誉教授 県立広島大学理事
平野　敏彦	（法学）	広島大学大学院法務研究科教授
前川　功一	（経済学）	広島経済大学学長
松田　文子	（心理学・教育学）	福山大学人間文化学部教授
三浦　道子	（電気電子工学）	広島大学大学院先端物質科学研究科 教授
山脇　成人	（臨床医学）	広島大学大学院医歯薬学総合研究科 精神神経医科学教授
横尾　京子	（健康・生活科学）	広島大学大学院保健学研究科教授 （副研究科長）
吉里　勝利	（基礎生物学）	（株）フェニックスバイオ学術顧問

【山口県】

小川　全夫	（社会学）	山口県立大学大学院　教授
加藤　紘	（臨床医学）	山口大学名誉教授
早川　誠而	（農学）	山口大学名誉教授
松﨑　益徳	（臨床医学）	山口大学大学院医学系研究科 器官病態内科学教授
三浦　典子	（社会学）	山口大学人文学部教授

【徳島県】

市川　哲雄	（歯学）	徳島大学 ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部教授
曽根　三郎	（臨床医学）	徳島大学大学院 ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部教授

【香川県】

一井　眞比古	（農学）	香川大学学長
井原　理代	（経営学）	香川大学大学院地域ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ研究科 教授，研究科長
○嘉門　雅史	（土木工学・建築学）	高松工業高等専門学校校長
神江　伸介	（政治学）	香川大学法学部教授
實成　文彦	（健康・生活科学）	香川大学医学部人間社会環境医学講座 衛生・公衆衛生学教授

【愛媛県】

佐藤　晃一	（食料科学）	ARU（地域環境工学）研究所 （愛媛大学名誉教授，農学博士， 技術士（農学部門））
橘　燦郎	（食料科学）	愛媛大学農学部教授 図書館農学部分館長
田邉　信介	（環境学）	愛媛大学沿岸環境科学研究センター 教授
野並　浩	（農学）	愛媛大学農学部教授
○山内　晧平	（食料科学）	愛媛大学社会連携推進機構特命教授 南予水産研究センター長

【高知県】

赤澤　威	（基礎生物学）	高知工科大学・総合研究所　教授
飯國　芳明	（農学）	高知大学大学院 黒潮圏海洋科学研究科教授
宇高　恵子	（基礎医学）	高知大学医学部免疫学教室教授
岡村　甫	（土木工学・建築学）	高知工科大学教授
○佐久間　健人	（材料工学）	高知工科大学副理事長・学長
野嶋　佐由美	（健康生活科学）	高知女子大学学部長
藤田　正憲	（環境学）	高知工業高等専門学校校長

※○印は会員

※所属は 2008 年 10 月現在

地区会議事務局からのお知らせ

1　平成２０度日本学術会議中国・四国地区会議事業報告

事業名・期日（時期）・場所等	事　業　内　容
第１回地区会議運営協議会及び科学者懇談会 平成 20 年 5 月 8 日(木) 13：30～18：30 岡山大学資源生物科学研究所 （倉敷市）	○地区会議運営協議会 地区会議の運営等について ○科学者懇談会 唐木部長を囲んで地区構成員との懇談（東中国地区及び四国地区）
第２回地区会議運営協議会 平成 20 年 11 月 28 日(金) 11:00～12:00 鳥取大学	報告事項 ①日本学術会議中国・四国地区会議運営協議会委員及び代表幹事の選考について ②平成 19 年度実施事業について 協議事項 ①平成 20 年度事業計画について ②平成 21 年度公開学術講演会の開催について ③科学者懇談会について
第１回公開学術講演会 平成 20 年 11 月 28 日(金) 13：15～17：00 鳥取大学 （工学研究科棟大講義室）	『地域の知の拠点-鳥取大学の新たな試み-』 第Ⅰ部　基調講演 基調講演Ⅰ『地域と大学』 慶應義塾大学教授・鳥取大学客員教授　片山　善博 （前鳥取県知事） 基調講演Ⅱ『鳥取の梨産地と鳥取大学農学部との関わり』 鳥取大学農学部教授　田邉　賢二 第Ⅱ部　パネルディスカッション『持続的過疎社会の構築に向けて』 パネリスト　七條　喜一郎(有限会社 内水面集研究所) 谷本　圭志(鳥取大学工学研究科准教授) 内田　格(日南町役場企画課長) コメンテーター　片山　善博 コーディネーター　日置　佳之(鳥取大学農学部教授)
第３回地区会議運営協議会及び科学者懇談会 平成 21 年 3 月 9 日(月) 14：00～17：00 広島大学医学部広仁会館 （広島市）	○地区会議運営協議会 報告事項 ①平成 20 年度実施事業について 協議事項 ①平成 21 年度事業計画について ②平成 21 年度公開学術講演会及び科学者懇談会の開催について ③平成 21 年度地区ニュースについて ○科学者懇談会 鈴村副会長を囲んで地区構成員との懇談
地区ニュース発行	地区ニュース

２　平成２１年度公開学術講演会及び科学者懇談会の開催について

【公開学術講演会】

日　時：平成 21 年 7 月 11 日（土）　14:00～16:20

場　所：徳島大学医学部・臨床第二講堂（蔵本キャンパス）

テーマ：「医学と社会の接点」～難病克服に立ち向かう生命科学の創造と魅力～

医学系、歯学系、薬学系等への進学を希望している高校生を主な対象として、学術会議会長　金澤先生と徳島大学教授（予定）に、難病克服に向けた自らの人生体験をもとに、何故、現在の専門を選んだのか、どのように取り組んでいるかなど、生命科学研究の面白さと魅力を語っていただきます。

【科学者懇談会】

日　時：平成 21 年 7 月 11 日（土）　16:30～18:00

場　所：徳島大学大学院 HBS 研究部第１会議室（２階）（蔵本キャンパス）

問い合わせ先：徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

呼吸器・膠原病内科　曽根三郎連携会員

Tel: 088-633-7126 Fax: 088-633-2134

※詳細については，別途ご案内させていただきます。

原稿募集

地区ニュースは科学者の方々と日本学術会議中国･四国地区会議との連繋を図ることを主な目的としております。

日本学術会議あるいは教育，研究，学術等に関する率直なご意見，ご希望等をお寄せくださいますようお願い致します。

お 願 い

回覧等により，多くの方々に読んで頂きますよう，ご配慮願います。

日本学術会議中国・四国地区会議事務局

〒739-8524　東広島市鏡山一丁目１番１号

（広島大学学術室学術企画グループ内）

TEL：　082-424-4336　FAX：082-424-6990